



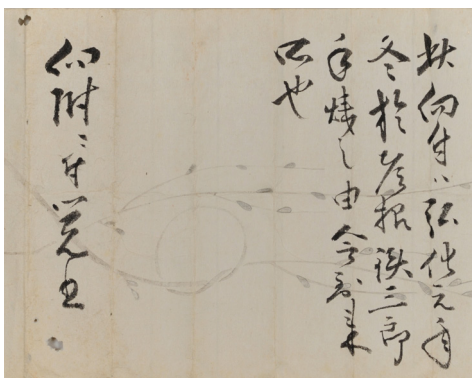
井伊家十三代直弼と楽焼制作

井伊家十三代直弼（一八二五〜六〇）は、江戸時代後期の代表的な大名茶人として知られています。幼少期から茶の湯に親しみ、成人してからは一層その研鑽につとめ、自らの流派を開くまでに至りました。世継や藩主となっても、茶会の開催や茶書の執筆、茶道具の制作などに熱心に取り組みました。



写真① 楽焼橘紋形向付 井伊直弼 作（当館蔵）

直弼は、未だ庶子であった二十八歳頃に楽焼の茶道具の制作を始めました。世継となつて江戸に出てからは、京焼の名工尾形乾山の流れを汲む陶工三浦乾也から技法の伝授を受けました。直弼の楽焼作品は、記録に残るものを含めると一〇〇点以上も確認され、茶碗や茶入、香合、蓋置など多種に渡ります。これほどに多くの楽焼を自ら制作した大名は、同時代はもろろん、それ以前も以後も他に確認できず、注目されます。



写真② 向付二付覚書 井伊直亮 筆（当館蔵）

直弼は、自作の楽焼の多くを家族や身近な家臣に贈っています。写真①の向付も、直弼が自ら制作し、兄の十二代直亮に献上した作品です。釉の黄味がかつた朱と濃い緑が響き合い、華やかな印象を与えます。

直弼の楽焼作品の多くは、「柳」の字をくずした花押が入っています。が、この作品にはなく、無銘です。しかし、収納箱の蓋表に、「澗露軒造之」と直弼が自らの号を書き付けており、彼の作であることは間違いないと推察されます。当主への献上品であるために、銘を入れるのを憚ったのではないかと判断されます。

写真②は、この作品を贈られた際に直亮が記した覚書で、「此向付八弘化元年冬於彦根鉄三郎（直弼）手焼之由令到来所也」と記されています。書付の地下には薄墨で結び柳の絵が描かれており、これは直弼が柳を好んでいたことを意識しての意匠かと考えられます。

直亮の書付から、この向付は、直弼が世継となる以前、弘化元年

（二八四四）（三十歳頃）に制作されたことが分かります。現存する直弼作の楽焼の中では制作年が明らかでない唯一の品で、しかも初期の作となります。細かく不規則な凹凸が目立つ表面の質感や、篋削りのたどたどしさ、やや濁った釉の色合いなどに技術的な拙さを感じられ、楽焼に手を染めて間もない頃らしい素朴な作風です。

本作は、井伊家の家紋である橘をデザインした形です。直弼は、井伊家当主である直亮にふさわしいデザインとすべく考えを巡らせて、この形としたのでしょう。五枚のそれぞれは、釉の掛かり方こそ異なるものの、形はほぼ同形に作られており、成形用の型を作り、その型を用いて制作したと考えられます。揃った形になるように、生真面目に制作に取り組み直弼の姿が思い浮かんでくるような作品です。

【彦根城博物館学芸員 奥田晶子】

写真の作品は、常設展示で11月4日（月・休）まで展示します（期間中無休）。